ライフサポート

禅道場で耳順の精神学ぶ ④

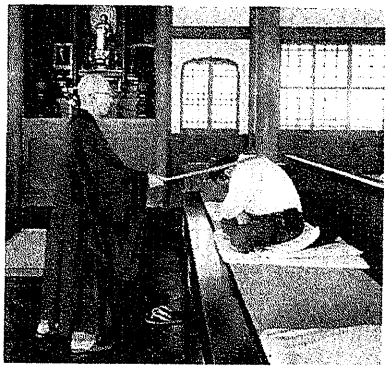
体・験・学

長岡禅塾に関心を持ったきっかけは宗教法人ではなく、公益財団法人だったことだ。住友総理事、伊庭貞剛氏の影響で禅を経営に取り入れた岩井勝次郎氏（岩井商店＝現双日＝創業者）が、禅を通じた人材育成と育英事業を目的に私財を投じて創建した、と知って驚いた。

岩井氏は1935年11月25日に設立趣意書をまとめ、その後1カ月足らずで亡くなった。戦前にこんな立派な企業メセナがあったとは。遺志をくんだ長岡禅塾が開眼供養を迎えたのは39年のことだ。

現在は岩井商店にゆかりの会社を中心に構成する企業グループ「最勝会」が、禅塾の運営を支える。会の名称は岩井氏の戒名「最勝院大徹無為居士」に由来する。伊庭氏、岩井氏とも東領禅師という禅僧の言葉「君子財を愛す、これを取るに道あり」を大切にした。「企業が利益を追求するのは良いが、その手段が人の道に反してはいけない」という意味。企業不祥事が相次ぐ現代でも通用する至言だ。

19年に岩井氏が定めた10カ条の訓示の最後に「身分の如何（いかん）を顧みず、遠慮なく上役に意見を開陳すべし」とある。今風に言えば「内部通報制度」みたいなもの。毎年、禅塾を訪ねているという双日の加瀬豊会長は「十訓は先進的で今も経営の指針」と話す。禅の体験取材だったが、長年続けてきた企業取材の側面から見ても長岡禅塾と岩井氏は魅力的だった。ただ、前塾長の浅井義宣老師が先日お亡くなりになったのはまことに残念だ。



合掌した後、警策で打たれる

警策で肩「バシッ」爽快な気分

人生に迷った日には再び…

今回の体験修行に先立ってかなり予習をした。ただ、実技編では大きなピースが欠けていた。座禅を組んでいる時に「警策」という木の棒で背中を打たれ、雑念や睡魔をはらうあのバシッである。こちらが合掌して合図すれば打ってもらえると教えられていたが、本番では合図の仕方を忘れてしまった。

2泊3日の日程を終え、北野大雲老師に退去のあいさつにうかがった時、「やり残したのを後悔しています」と話すと、「じゃあ今から禅堂に行きますか」と言って特別に機会を作ってくださった。帰るつもりだったので既に着替えを済ませ、着物も袴（はかま）もなしのラフな格好で半跏趺坐（はんかふざ）の姿勢をとった。最初のように額から汗が噴き出さないのが不思議だった。

北野老師が近づいてくる。私は合掌し、さらに前方にかがんで左の肩を老師に見せるようにした。バシッ、バシッと2回。次は右の肩を見せてまた2回。爽快な気分になった。周囲の意見に耳を傾けようという耳順の心も芽生えてきた（ように思う）。だがこの先、きっと人生に迷う日は来る。その時は老師、警策でバシッとよろしくお願いいたします。

（この連載は竹田忍〈57〉が担当しました）

ひと言 34年前の就職活動で日商岩井（双日の前身）も訪問した。企業研究をしたが長岡禅塾の存在は知らなかった。

日経 2016.12.22(夕) 9面